

奨学金破産

「あくまで借金」認識は

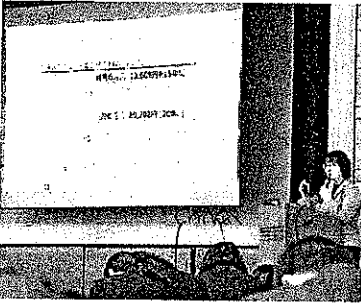
高校で制度説明 就職後の生活描く

反響編下

「奨学金破産」をめぐる報道には、奨学金は借金だと明確に伝わっていないのではないかと、という疑問が多く寄せられた。教育のための「ローン」と呼ぶことで卒業後のことをしっかり考えられる、という投書も相次いだ。

「返還がこんなに大変だと知っていたら(略)借りるなんて言わなかった」(35歳女性) 「私の首をここまで絞める(略)なんて」(女性)

山梨県の高校で奨学金の申請手続きを担当していた元教諭(62)は、奨学金を返せず自己破産する例を知り、教え子を感じた。「自分も加担していたのではと苦しい気持ちになります」手続きに必要な書類を集める中で、借りざるをえない家庭の事情が見えてしまう。とはいえ、こんなに借金を背負って大丈夫か。



ファイナンシャルプランナーが高校2年生に制度の説明をした。東京都東大和市

懸念を抱きながらも、大学に行きたいのなら、と申請させてきたという。

「返す額がいくらになるか。働きながら返すのがどれだけ大変か。もっと伝え方がよかったかもれない。ただ、受験を控えた18歳前後の生徒にどこまで届いただろう、とも思う」

日本学生支援機構は「奨学金は無利子や低金利で貸与しており、営利事業ではない」などとしてローンという呼び方はしていない。一方で2015年度に抽出調査したところ、3カ月以上延滞している人では、申し込み手続きを行う前に返す義務があると知っていたのは51%にとどまった。

こうした結果を受け、機構は昨年末、ファイナンシャルプランナーを高校などへ派遣する試みを始めた。資金計画のプロが「奨学金は借金」と伝え、就職後、奨学金を返しながら生活することを具体的にイメージさせるのが狙いだ。

反響の中には、多額の奨学金を借りて大学に進むことへの賛否も多く寄せられた。「大学に行くのが当たり前と思っているようだが、考えを改めるべき」(50代男性) 「高等教育は個人にとってだけでなく、社会にとっても有益で、せい

たくではない」(40代女性) 2人の子ともがいる秋田県の介護福祉士の女性(52)からは、複雑な胸中をつづったメールが届いた。「息子の毎月の返還が気がかりでならず、娘を高卒にしてしまったことに苦しい気持ちになります」

長男(26)のため、400万円余の教育資金を積み立てていたが、足りなかった。結局、長男は450万円の奨学金を借りて、大学と大学院(理系)を出た。首都圏の印刷会社に就職し、手取り20万円ほどの給

与から毎月3万円を返しているが、楽ではななかった。一方、長女(21)は高校卒業後、事務職の仕事に就いたものの、給料の安さを嘆いている。私大に進むことが決まっていたが、女性に人が見つかり医療費がかさむため断念してもらった。

大学や短大、専門学校など高等教育機関への進学率は17年度、過去最高の80.6%にのぼった。独立行政法人「労働政策研究・研修機構」によると、高卒と大学・大学院卒の生涯賃金格差(退職金を除く)は男性で約6300万円、女性で約7千万円になる。

「できれば娘を大学に行かせてあげたかった。でも、多額の借金を背負ってまで行かせるのがよかったのか。私には今も簡単には答えが出せません」

(諸永裕司、阿部峻介)

リスクの周知も

小林雅之・東大教授(教育社会学)の話 奨学金は経済事情に関わらず高等教育を受けられるようにするためのものだ。この必要性は論をまたないが、経済環境の変化や大学進学率の上昇で制度のゆがみが現れ自己破産が相次いでいるのも確かだ。無理なく返還できる制度への改善はもちろん、これから奨学金を借りる人には借りすぎの危険性を、返還中の人には様々な救済制度を、機構がしっかりと周知することが重要だ。